草の芽句会だより

NO,17 1
22,11,3

口開けて鯉の遊べる浮もみじ　範子
句友らし桜もみじの広場に一人

月桃の身の赤み増す冬近し　純子
秋空に尺八の音の溶けゆけり

戦止む気配もなくて神の留守　文子
城跡の露のベンチの忘れ物

つぎつぎと訪れる城菊花展　貞子
城上る晴れのとくい日文化の日

風に舞い桜落葉のひらひらと　節子
友に会うハンドル軽し文化の日

上り下り見返り坂の薄紅葉　禮子
菊花展隅に置きある人力車

師の句碑に心遊ばせ秋惜しむ　剋子
手の届く高さに十月桜かな

大楠のそびゆる寺苑秋の空　芳子
秋晴や寺苑をめぐる心地よき

出席者　川原　氏家　森　吉崎　大黒
　　馬場　小山
投句者　小林

素晴らしい秋晴れである。天守閣の空は青く高くどこまでも広がり、大手門広場では恒例の菊花展が開かれていた。祝日でもあり大層な人出である。家族連れや若者のグループ、賑やかに見返り坂を駆け上る子供たち。うるし林は紅葉した木々の落葉が散り敷いて、ベンチには尺八を吹く男性の姿が。草叢では虫が鳴いて、城山は秋たけなわ、私達の足どりも軽い。

帰り道、寿子先生の句碑に立ち寄る。月日を経て風格を湛えた句碑は周りの景に溶け込んでいて在りし日の毅然とした先生のお顔が蘇る。いつも若々しいお声だった・・。

次回は十二月納句会である。一年が過ぎる速さに今さらながら驚くばかり。元気で過ごせたことを喜ぶことにしよう。賑やかなお喋りと美味しいお弁当を楽しみにしたい。